Ｌｅｍｕ（レム）

青い絵　八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｅｍｕ（レム）

【Ｎコード】
Ｎ８３５９Ｚ

【作者名】
青い絵　八代

【あらすじ】
やる気、その言葉に重みを感じたことは無かろうか。そう、それはやる気を失い続けてきた人間のはかない性。
現実が幻覚に埋もれたとき、人は真の世界を見る。
それが、暗闇な亡霊その物であっても。
少年の名は、魔神真（まがみしん）。これは彼のための物語。

プロローク　白夢の中

この世界は、深遠でかつ浅はかだと、僕は思っていた。この世界は、どこまでも狡猾でかつ傲慢だと、僕は信じていた。僕ほどの人間が、人間関係を捨てた理由はそこにある。

結局、誰と関わったところで、結論は一つなのだ。

だったら、こんな世界に関わる理由はない。そうだ。

僕の名前は、魔神真（まがみしん）。なんとなく、僕は窓際で風を受け、黄昏ていた。もし、僕がこの風だったらどこまでも飛んでいけるのにと、意味不明なことを露骨に思った。

僕は、今壊れている。その理由は諸説在る。昔、父と母が離婚したこと、そして僕の友達が皆死んだこと。それは、僕にとっては大きなことだった。その理由は今でも分かっていない。しかし、懸命に考えた結果がこれだ。このほうがよほど無残だ。

運命の針が、僕をここに食い止める。僕はもう、この状態から抜け出せない。

静かな夜の空間に、僕は空をなんとなく見上げた。

決して、そんなことで何かが変わると思ってはいないが。

僕が、魔神真であるように多くの人には名前がある。

例えば、君の名前にも意味がある。

そう、この世にあるものすべての名にも。

家でこうして、呆然としている時間には意味が無い。それは、名前とは正反対だ。もしかすると、名前以上に意味のあることはないのではないだろうか。

運命論そのものこそが、名前に関与している。

名前自体が、歴史なのだ。

そして、そこには教科書がある。

その教科書にすら、用語がぎっしりだ。

そう、人は名前に負けている。
そんなことを思い空を見上げているという今日という闇。
…。
…。
僕は、学校では学年一位の称号を得て、尊敬されている。
しかし、僕は周りの世界との干渉をあまりしない。
周りには、尊敬以外の感情をもたれないように行動している。我ながら、相当な鬱ぶりだ。
そんな日々を過ごしていながらも、僕を置いて世界は動く。
きっと、僕はこの世界に不要なのだ。
たとえ、こんなまばゆい世界にいたとしても、僕は漆黒にしか周りには写らない。
何をしたって。
何をやったって。
そんな風に空を見上げていると、ふと後ろに気配を感じた。
もしかしたら、霊気。
振り返ると…、誰もいない。
僕は、少し疲れているのだと錯覚した。
だけど、その時の僕には判断する方法などなかったのだろう。
運命論で片付くことのほとんどがどうでもいいことだ。
もっと大切なことを僕は追い求めたい。
だけど、僕なんかじゃ誰も意義を感じてはくれないだろう。
僕は、帰り道を終え、自宅に帰り着いた。
「母さん、どうしたの？　」そこには母が居た。
そこで、何かを見たらしい。幻覚？
くだらない。
僕は、ほうっておいて、また二階へ。
いつも、この繰り返し。
僕は再び空を仰ぐ。
しかし、その果てにすら何も無いことに恐怖しか感じないのだっ

た。

そして、僕は死にたくなった。

…。

……。

……、だけどまだ死ねない。

プロローク　白夢の中（後書き）

影は、誰もの後ろにあり、時に人を惑わせる。
それが、最悪の方向に転がれば、すべてが闇に染まる。
だが、決してそんなことは起きない。
何故なら、人というもの自体が、影だから。

1話　無題

１０月下旬

僕は、何故か凄い悪寒を感じていた。だから、夜なのに家を出て公園に逃げ込んでいた。
この公園は広い、ここなら多少のことがあっても走って逃げれる。
それにしても、何もない公園だ。
僕は、いつものように空を見上げる。
星達は、今日も見えない。
何もかもが、この闇の中でひっそりとたたずむだけ。
……。
……。
何時間ぼっとしていたのだろう。
もう、夜が明けた。
僕は、自宅に帰り、学校の支度をする。
何かが…オカシイ。
何故だか、頭が重い。その時頭に浮かんだ文字は、『死』。
僕は、絶望の雨に体を濡らした。
目の前にあったのは、母親の血まみれな姿だった。
僕に言葉はない。
ただ自分のせいにされないがために、携帯で救急番号を押した。
しかし、僕にさほどの興味はない。
もう、仕方ないのだ。
何もしていないし、悔やんでもしょうがない。
後は、父親に任せよう。
『何も…していない』。
悲しいほどに、その言葉が……僕の胸に突き刺さる。
結局、人は何時か死ぬ。移ろいの中で消えていく。

悪いのは、時間なのだ。
僕だって死ぬし。
きっと、抗えないのだ。
必死の抵抗も空しく人は消え行く。
第一、精神でさえ老化する。
儚い。
……。
……。
母が死んだそれ以降、僕は不思議なものをより見るようになった。
人影。
幻惑。
幻聴。
幻視。
厳戒。
学校でも、家でも、何もかも腑に落ちないのだ。
母の、あまりに自死的な死に方に……僕は……。
僕は、僕なりの答えをようやく出すことに成功した。
この幻視や幻聴は、僕の心の叫びなのだと。
心が、悲鳴を上げていながらも、僕はその自分さえ見捨てるしかなかった。
そうじゃなければ……僕は……。
前に言った、運命論。
死に操られているのだ、僕たちは。
だけど、きっとそれでいいのだ。
僕たちは、死を越えてはいけない。
僕たちのゲームは、単に永遠の終わりなのではなく、死が……一回の終わりなのだ。
だから、生まれる前のことなんて分からない。
……。
……。

僕は日曜日、一日中部屋にいることにした。そこで、自分を慰めるためしばらく寝よう。
きっと、気持ちも晴れる。
曇り空は、今日も暗い。
しかしながら、ベッドにいるというのはあまりに単調だ。
だから、深夜。僕は以前のように公園へ。
……。
僕は弱い人間だ。
結局僕は、ただの死にたがりだ。
……。
公園には、人が居ない。
僕は、ベンチで横になった。少し肌寒く在るが、僕はあまり気にしないようにする。
喉が渇いたので、自販機でコーラを注文する。
その時だった、背後で物凄い叫びが聞こえたのは……。
僕は、焦ってその木影へと向かった。
正気を失う光景。
再び、僕は見た。
人が……、人をバラバラに切り刻んでいる姿を。
「ああ……あああああ…ああ」
僕は、一瞬ながら壊れた。
全力で叫んだ。
そのおかげで、殺人鬼は動揺して逃げ去った。
僕の目からは大量の涙。
悲しみの雨。
きっとこれは……夢だ。そう、自分に言い聞かせる。
……。
……。

1話　無題　（後書き）

（ミニコーナー）
魔神母「やあやあ、あたし死んじゃった」
真「おいおい、僕はもう限界だぜ」
母「仕方ないじゃない？　あんた学年一位なのに友達無いなんて心配だったのよ」
真「今も、い・な・い。悪かったな。とりあえず、何か友達が欲しいぜ」
母「この世界は凄く物騒だから。あんたは死なないでね」
真「当然死なない。いずれ分かるさ。僕の真の力が！」
母「分かった、魔力ね」
真「……？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8359z/

Ｌｅｍｕ（レム）

2011年12月29日09時45分発行